図書館への思い

等　　泰三

戦前の県立図書館は、現在の白川公園の一画にあった県庁の北隅に置かれていた。

その西側に30坪程の子供図書館があり、中学校に上るまで、毎日曜日通っていたので、図書館には特別な思いがある。

住んでいた熊本駅前からは、子飼橋まで通じていた電車に乗れば簡単とはいゝながら、国民学校、今の小学校二年生にとっては、かなりの冒険旅行であったが、つらいと思った記憶はない。

体操の時間は、雨が降れば自習時間で、二年生ともなれば、先生も職員室で休憩である。当然、自習時間は自由時間で、悪ガキの天下である。その命令で歌大会がはじまる。歌えない者にとっては、恐怖の地獄である。“イジメ”にもつながりかねない大変なピンチである。幸い“お話”することで切抜けて、ホッとしたのを憶えている。

また雨が降ったら、今度は初めから“お話”の注文である。歌わなくて良いのが嬉しかった。その後、雨の日になると“お話”大会となり、種がつゞくわけもなく、子供心にも種の仕入れに必死の図書館通いだったと思うが、結構楽しく、中学校に上るまで続いたようである。

中学校には、何倍も大きな図書館があったが、自由に選べる子供図書館とは違い、楽しんだ憶えはない。

昭和25年、新制２回生として入学した黒髪キャンパスにも、旧五高図書館があったが利用した憶えはない。

薬学部の大江キャンパスに移り、焼跡のバラックの中で、金庫かと思う程、コンクリート壁の厚い二階建の図書館は、いかにも、貴重な図書が一杯といった感じで、しかも自由に書庫の中で閲覧も出来て、楽しませてもらった。焼け残ったこの図書館が、薬学部の存続に大きな力となったと聞いている。

活字に飢え、印刷した物であれば飛ぶように売れた貧しい時代もすぎ、卒業し、昭和30年を過ぎる頃になると、図書館にも変化を感じれられるようになった。

一つは、従来の大事な図書を保管し、見せてやる所から、図書を利用してもらう所として、自由に手に取り選べるようなオープン方式を取り入れる所が現われた。まだまだ貧しく、盗難や、ページ切取りが頻発していた中での実行は大変だったと思う。

もう一つは、図書館員の“本のプロ”としての態度である。勿論、司書という職名は昔からあった。文字通り本を大事に管理し司どる人であるが、これが、本を利用する人へサービスし、盡くす人への変身のきざしがみられた。

当時、私の働いていた医療では、抗生物質、精神安定剤、副腎皮質ホルモンといったキレ味のいゝ医薬品が次々と登場し、その効果に驚きながらも、その作用の著しい故に副作用も現われ、大きな薬害事件のきざしもみられる時期で、心ある医師達の間では、医薬品の適正な使用についての情報の不足が、嘆かれ、不満が高まっていた。

調剤、製剤と従来の薬剤業務に精出していた未熟な薬剤師の私も、“薬のプロ”ならばこの医薬品の適正使用に手を貸すべきだと、その準備のための勉強をはじめた時であったが。一方、世の中も落ちつき、病気を治療する余裕も出たせいか、廊下に患者さんがあふれていても、設備や人数は昔のままで、従来の業務もまゝならない時期で、新しい仕事に目を向ける余裕もなく、いかに能率よくさばくかゞ、最優先の時代であった。

又、まだまだ、戦前からの、治療してやる、患者の生死を握る者でもあった医師の各々の治療には、薬の処方は同僚の医師さえも口に出せない、犯すことの出来ない医師の裁量権の範囲とみられていた時期であった。副作用を避け、適正に医薬品が使用されるよう、処方の評価、助言は天をも恐れないことになる。しかし少数といゝながら、教授をはじめベテランの医師からの『私の処方は厳しくチェックして下さい』といった言葉は、最大の支えであったが、同じように、“本のプロ”として努力されている姿には随分と、支えられたし、仲間といった親しさを感じていたわけである。

今では、殆んどの図書館も随分と楽しめるようになった。

我家を子供図書館跡に建てたのも縁だが、近くに図書館が二つもある。

両方を利用すると、二、三十冊は借り出せる。

本を選ぶのも楽しいし、期限までには目を通さねばとの義務感から、チラチラと目を通すし、時には二回三回読む本にも出会うのもいゝ。

特に違った視点に出くわすのが為になる。有馬氏の種子島（注１）を読んだ当時留学生ノエル・ペリン（注２）が秀吉の鉄

砲狩りを取りあげ、当時の原爆にも相当する鉄砲を、日本人が捨て、忘れたことから、今日世界が原爆を捨てることが出来るはずだというはげましにも、明治になって、小国町の山奥でひっそりと暮していたキリスト信者部落を、全員殺して消滅させていった事実を掘起した一町医者の記録とも出会った。

私の担当している健康科学の領域では、マラリアについて教えられた。十七世紀になって手に入れたキニーネは、全世界のマラリアによる苦しみから救ったが、これは奴隷商人の手をはばんでいたマラリアの壁を取りはずしたことになり、アフリカの人々の不幸のはじまりにもなったという視点が欠けているのを気づかせてもらったのは、図書館の一隅でみつけた図書からである。感謝している。

図書館には随分と楽しませてもらっているし、今後も死ぬまで楽しめるよう、目が見えて、文字が読めて、本が楽しめます様に神佛に願っている。

（ひとし　たいぞう　教養部教授　健康科学）

注1　火砲の起源とその伝流　有馬成甫　吉川誠文館 1962

注2　鉄砲をすてた日本人 ―日本に学ぶ軍縮　ノエル・ペリン著　川勝平太訳　紀伊國屋書店　1984

注3　肥後細川藩 幕末秘聞　河津武俊　講談社 1993

注4　世界史の中のマラリヤ　橋本雅一　藤本書店 1991

シリーズ熊本大学附属図書館蔵特殊資料紹介11

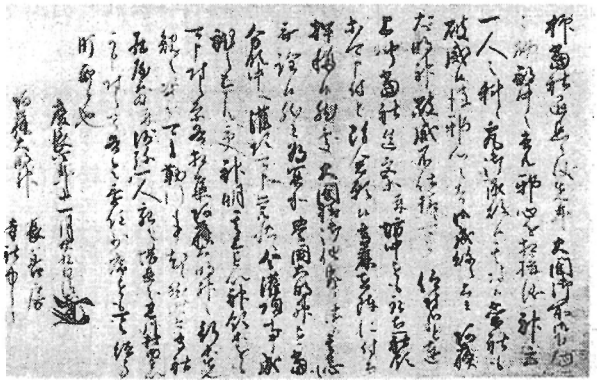
重要文化財　阿蘇家文書（34巻36冊）

工　藤　敬　一

今回は近世の阿蘇社領の成立に関わる文書を紹介する。戦国末、阿蘇勢力は衰退し、天正14年（1586）には山上の諸坊（現在の草千里辺にあったもので古坊中と呼ばれる）も島津氏によって焼き払われ、阿蘇氏の家臣も山上の衆徒・行者も四散してしまい、中世阿蘇氏武士団はほとんど壊滅状態となった。加うるに文禄元年（1592）大宮司惟光は、豊臣秀吉から梅北の乱（加藤清正の朝鮮出兵の最中に、島津義久の家臣梅北国兼が佐敷城を占拠した事件）に関わる責めを負わされて祇園山（花岡山）で殺害された。

加藤清正は、慶長4年（1599）領国支配の安定を考え、阿蘇社および諸坊の再興を図った。〔A〕（西厳殿寺文書）は「寺社居屋敷ならびに沙弥一人宛の堪忍分」として、つまり衆徒・行者らが坊舎を興し還住するよう黒川村内の地を付与したものである。この黒川村が今日の阿蘇町坊中である。さらに慶長6年清正は神主又次郎（惟光の弟の惟善）に対し、宮地・坂梨・竹原（いずれも一の宮町）に358石3斗4升の石高の土地を宛行っている。〔B〕はその宛行状、〔C〕は目録である。いずれも「履道應乾」の印文をもつ台形の清正の黒印が捺されている。

〔D〕は加藤氏改易のあと、寛永9年（1632）肥後の大守となった細川忠利の判物（花押をもつ宛行状）である。宮地・坂梨・竹原・黒川の所々989石余とあるので、さきの清正の2通の宛行分を加えたものとみられる。同日（寛永10年正月7日）付の目録（〔E〕）が西厳殿寺文書の中に見える。その後貞享4年（1664）12月、当時の藩主細川綱利は新に蔵原村（一の宮町）の



（佐藤進一著「古文書学入門」より転写）

［A］

加藤清正判物（西厳殿寺文書）

抑當社退点之儀、先年大閤御所御下向（天正十五年）（転）
之砌、郡中之者共邪心を相搆儀、神主
一人之科二究、御成敗候、其付而當社も
破滅候、彼邪心之者御成敗之上者、阿蘇
大明神破滅不仕様二可被　仰付哉と達
上聞、當社造宮等并坊中をも取立、社領
等可申付と雖念願候、高麗在陣に付而
押移候、然處、大閤様御他界二依而、其志も
無詮候、然者、爲冥加、豊國大明神を當
分領中へ灌頂可申(勧誘)悟候、令灌頂事(勧誘)成
就之上にて受神明、其上を以神領等をも
可申付之条、各相集、阿蘇大明神之行等、先
規之姿を可有勤行事尤候、然時者、寺社
居屋敷并沙弥一人宛之堪忍分、黒川村内を以
可申付之間、各令遵佳、少庵をも可被結事
肝要候也、

慶長四年十一月廿九日　　清正（花押）

長善房
阿蘇大明神
寺社中